

壁

国枝利久

伝平康頼の『宝物集』に次のような一節がある。

「維摩経ノ十喻ニモ 此身ハ水ニ宿レル
月ノ如シ 電ノ如シ 芭蕉ノ如シナ
ド申シタレバ 諸行無常ナリト観ジテ
仏法ヲ宝ト思ヒ給フベキ也 維摩経ノ
心ヲ歌ニモ読侍リ

手ニ結ブ水ニ宿レル月影ノ 有ルカ
無キカノ世ニモ在ル哉 貫之

世ノ間ヲ何ニ譬ヘン秋ノ田ノ 穂ノ
上照ラス夜半ノ稻妻 源 重之

長キ夜ノ夢ノ中ニテ見ル夢ハ 何カ
現イカガ定メン 権僧正永緑

サレバ 諸行無常 是生滅法 生滅滅
已 寂滅為楽ト観ゼン人ハ 皆仏法ノ

インターネット公開許諾のない文章には墨消し処理を施しています。

宝ヲ儲クベキ也(七巻本)

ところが、羅什訳維摩經方便品の十喻の中には、「如水中月」という比喩はみあたらない。念のために、支謙訳・玄奘訳・チベット訳を調べてみてもその比喩はみあたらない。また、「如水中月」という比喩を詠んだ例歌として引かれている貫之の「手に結ぶ」の詠の詞書を私家集『貫之集』で調べてみても、「如水中月」という比喩を詠んだというようなことはしてない。

ここで、私は『宝物集』を精読してゆく上での一つの壁(問題点)につきあたったのである。学徒である以上、壁に対してむなしく座しているわけにはゆくまい。つきやぶらねばならない。

そこで何等かの手がかりを得るために、維摩經十喻を詠んだ中古の和歌作品を学生諸君たちとともに精査してみると、以外にも、公任や公重の維摩經十喻の作品中にも「如水中月」を歌題としている作品があったのである。この時以来——野や岡には爽やかな五月の風がわたってゆ

くにもかかわらず——私は、「如水中月」という比喩のために悩む日々がつづくことになったのである。



たまたま、仏教文学学会で研究発表をする羽目になった私は、某日ふと気付いたこの問題を思い切って採りあげることとし、東京サミットも終わり雨の激しかった六月末日、「維摩經十喻と和歌」と題して発表をこころみ、なんとか使命(?)を果たしたのではあるが、——緊張感から解放された帰途の車中で、私は心の隅で葛藤している二つの影のあることに気づいた。その影は、次のように囁いているようだった。

●『宝物集』にかぎらず、作品をこういう態度でしか読めないのは、ある意味では不幸なのではあるまいか。

●そうではない。そのような壁(問題点)を見つけないで、——時には、研究意欲を著しく喪失させるような無情な壁にめぐりあうこともあろうが、——そうした壁をやぶろうと努力し続けるこ

と自体がなにもにもかえがたい幸せなのだ。

そのいずれが正しいかを、私はいま茲で断定する要はあるまい。

ともかくも、車窓から見える富士の姿は限りなく雄大であり、雨の過ぎ去った駿河路の空は限りなく浩く澄みきっていたのである。そして、私の健康状態もまづ良好である。また、良き師・良き先輩・友にも恵まれている。

釈教歌研究の道はなお遠く遙かな道程ではあっても、それ故に、私は一步一步ふみしめて、壁を超えてゆきたい。

(くにえだ としひさ 文学部教授)

